

千葉大學三十年史

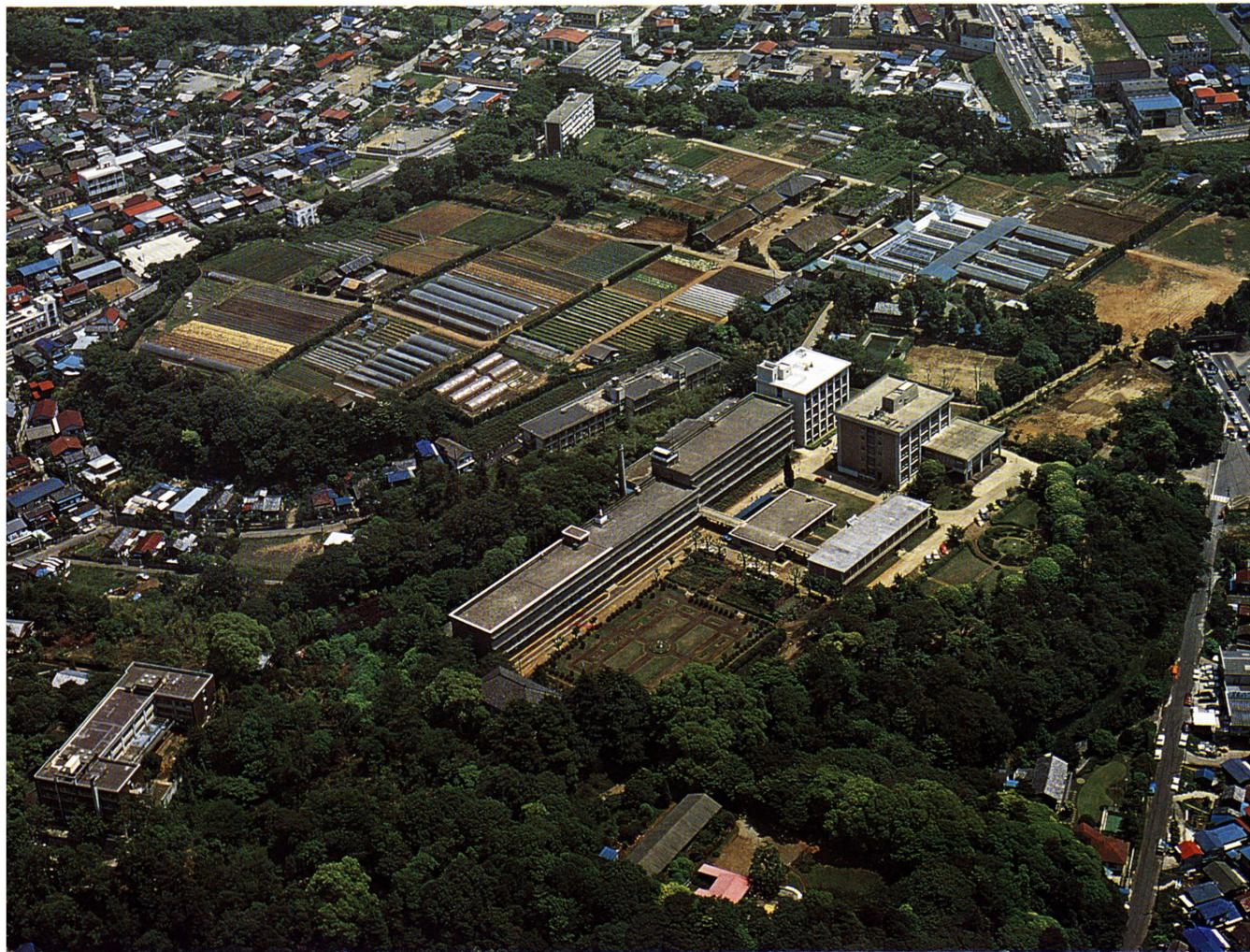




西千葉キャンパス全景



亥鼻キャンパス全景



松戸キャンパス全景



初代学長 小池 敬事



第2代学長 小林 政一



第3代学長 荒木 直躬



第4代学長 谷川 久治

学長事務取扱(昭和37.1.31~37.3.1)



第5代学長 川喜田 愛郎



学長事務取扱 湊 顕

(昭和44.4.2~44.6.23)



第6代学長 相磯 和嘉



現学長 香月 秀雄

学長事務取扱(昭和44.6.24~45.7.31)

序

千葉大学長

香月秀雄

一つの新しい組織機構が計画され、着手され、そしてそれが成育して行く過程には、膨大な力が消費され、そして時間という因子が介在する。

新制千葉大学が発足し歩いてきたこの30年の歴史の中にもどれ程多くの人達の努力が注がれてきたか、それは計算することも出来ない程の量と質をもち、更に入魂の難行を伴っていたものである。しかし30年前に、出発すべき新しい大学としての機構はどのように計画され、そして将来の展望は如何様に画かれていたのであろうか。

幾つかの、広い意味での高等教育機関ともいうべき組織を合体させることにより、旧制度下にあった総合大学の複製を意図していたものであったのか、或は、全く新しい理念の下に大学の理想像を求めて計画されていたのであろうか。

古いものは、その存在の理由を古きが故にもつものでなく、それが組織体である場合、それが機能するために変貌を加え、逐時これに加えられるもの、或は反面捨て去られていったもの、その生成、同化と異化の相克の歴史の中に自体の存在の評価を受けなければならないのである。

機構・組織が徒に膨脹し、その目的とする大学としての機能が、意図しているものと異った道を歩み始めているかに見えた旧制度下の大学は、当時既に総合大学というより複合大学の様相を呈していたようである。

勿論、複合大学とも称せられる機構も、またそれはそれなりの独自の意味を持ち、一概にこれを排除すべきではなく、現在の日本に於てはその利点について改めて考えなければならない問題を抱えている。

しかし、新制大学が発足した30年前には、少なくとも大学が学術の中心として、広く知識を授けるための機能を維持するものとして考えられ、組織の膨大化に伴う様々な弊害への反省がこめられていたことであろうし、また教育・研究の両面から片寄りの無い展開を大学の場に期待し、同時に高等教育全般の普及、質の向上を意図していたものと考えられる。

昭和の戦乱の直後に敗戦に打ちひしがれた国民の意欲が学問への指向、高等教育の

整備、充実に注がれたことは、明治の夜明けに開かれた初等教育の普及に次いで、わが国の教育改革に向けて第二の新時代の到来であったとも言える。

高等教育の普及という社会的要請は、国家の存続、繁栄という大きな問題を、国家の孤立化を防ぎながら世界の連帯の上に成立させることに向けられたものである。

しかし連帯ということは寄りかかることではなく、それぞれが応分の自主能力を備えたものという前提の上に成立することを忘れてはならないのである。その意味からも大学が、世界の連帯の中にある国家としての誇りを維持するための学術・研究の中心であることが最小限の設置理念と考えなければならないのである。

さて千葉大学の歴史を30年史の過去にさかのぼってみることは、一人千葉大学のみならず、同時に発足した多くの新制大学の生々流転の歴史をふり返ることであり、そこに居て、そこを去っていった多くの人達の遍歴と回帰の想いでもある。そしていま30年の歴史の上に位置づけられた本学をこれからどのような考え方の上に熟成させてゆくかが、この大学に職を奉ずる者、ここで学ぶ者、そしてこれを取り巻く多くの機構とそれを構成する人達の責務として大きくのしかかっているのである。

地理的に千葉県は、地方的な面と首都圏的な両面をもっている。地方自治を強調し首都圏の立場から分離し孤立することも出来ず、反面、首都圏に埋没し、動きの全てがこれに左右されることも避けねばならない。

千葉大学の位置づけも必然的にこれに似た意味をもち、地方大学としてその地域の機能に寄与する立場に置かれる反面、首都圏大学として、全国の少なくとも国立大学の連合機能に直接参画する立場に置かれ、これに応じうる内容と力を持たねばならないと考える。その為には、少なからぬ山をわれわれは、これから越えて行くことになるろう。

焦らず、急がず、止ることなしに、千葉大学を大学たらしめる為の着実な歩みをわれわれはすすめて行きたい。

終りに、本30年史を編纂するに当たり、全学の教官・職員の方々の絶大な御協力はもとより、既に学外に去られた多くの教官・職員の方々の温情溢れる御尽力により、貴重な資料の収集を得る事の出来たことを心に沁みて有難く感じている。

尚、白田貴郎教授を委員長とする編纂委員会・専門委員会の方々、これを支えた事務局の諸君の長い期間に亘る御苦勞と熱意は、この30年史と共に脈々として後に続く千葉大学の人々の心の中に生き続けることと思う。ここに深甚の謝意を表するものである。

目 次

序

第 I 部 総 編

序 章 —新たな総合大学への道—	3
第 1 節 新制千葉大学の創設—小池学長時代—	4
第 2 節 基盤の整備—小林学長・谷川学長時代—	6
第 3 節 学園紛争—川喜田学長・湊並びに香月学長事務取扱時代—	7
第 4 節 総合化への道—相磯学長・香月学長時代—	8
第 1 章 千葉大学創設への胎動	11
第 1 節 敗戦と教育政策の転換	11
第 2 節 教育民主化の動向	16
第 3 節 千葉総合大学の建設	20
第 4 節 千葉学芸大学創設運動	24
第 2 章 千葉大学の発足	29
第 1 節 千葉大学の創設	29
第 2 節 学芸学部と専門学部	34
第 3 節 学生生活の諸相	39
第 3 章 初期の拡充と学生	47
第 1 節 初期の大学管理運営	47
第 2 節 学芸学部の改組	51
第 3 節 新制医学部の発足と拡充	53
第 4 節 各学部の拡充	55

第5節	小中台移転後の学生生活	63
第4章	千葉大学統合整備の方針	69
第1節	統合整備計画基本方針の確定	69
第2節	統合計画の推進	74
第3節	統合整備小委員会の活動	78
第4節	統合移転の具体化	83
第5章	西千葉地区への統合と施設拡充	87
第1節	事務局の移転と学生部	87
第2節	附属図書館の移転と拡充	89
第3節	教育学部と文理学部の移転	91
第4節	工学部・工業短期大学の移転	96
第5節	薬学部の移転と教育体制	98
第6節	園芸学部新校舎竣工と定着	100
第7節	留学生課程の移転と独立	103
第6章	統合後の学生生活	109
第1節	安保反対闘争とその後の自治会活動	109
第2節	サークル活動の活発化	115
第3節	学寮および厚生施設の拡充と生協の定着	123
第7章	矢作・亥鼻地区の整備・統合	133
第1節	統合整備計画と矢作・亥鼻地区	133
第2節	統合整備の再編	136
第3節	腐敗研究所の拡充と移転計画	141
第8章	一般教育の理念と現実—文理学部改組の諸問題—	145
第1節	文理学部における一般教養と専門教育	145
第2節	千葉大学における状況	149
第3節	教養部の設置	152
第4節	人文学部および理学部の設置	155
第9章	学 園 紛 争	163
第1節	わが国の大学の一般的状況	163

第2節	千葉大学における学園紛争(その1)	
	—西千葉地区における紛争の経過—	166
第3節	千葉大学における学園紛争(その2)	
	—亥鼻地区における紛争の経過—	178
第10章	学 内 改 革	181
第1節	学内改革問題の検討	181
第2節	学長選挙制度の改革について	183
第3節	管理運営組織の改革について	187
第4節	学生の地位・参加について	191
第5節	自衛官の通入学について	192
第6節	医学部における改革について	196
第11章	研究教育体制の拡充と発展—総合化への道—	201
	概 要	201
第1節	環境科学研究機構	204
第2節	国際交流と大学の公開	210
第3節	創立30周年記念事業	217
第4節	新病院の建設	220
第5節	看護学部の創設	228
第6節	総合薬品科学研究科の設置	232
第7節	腐敗研究所から生物活性研究所へ	233
第8節	工業短期大学部の改組	237
第9節	保健管理センターの設置と厚生施設の整備	241
第10節	分析センターの設置	244
第11節	教養部の拡充整備	246
第12節	人文学部の拡充整備	250
第13節	教育学部の拡充整備	254
第14節	理学部の拡充整備	260
第15節	医学部の拡充整備	263
第16節	工学部の拡充整備	268
第17節	園芸学部の拡充整備	273
第18節	附属図書館の拡充整備	278

第19節	西千葉・亥鼻両地区の総合的な整備計画	281
第20節	総合大学院構想	284
将来への展望		289

第Ⅱ部 部 局 編

第1章	教 養 部	301
第1節	教養部への歩み	301
第2節	教養部の組織と運営	313
第3節	教養部の発展と課題	329
第4節	教育・研究活動	343
第2章	人 文 学 部	379
第1節	人文学部の歩み	379
第2節	教育・研究活動	390
第3章	教 育 学 部	441
第1節	前 史	441
第2節	教育体制・組織	447
第3節	管 理 運 営	462
第4節	教育・研究活動	467
第5節	学 生 生 活	492
第6節	施 設	498
第7節	附 属 学 校	501
第4章	理 学 部	567
第1節	理学部への歩み	567
第2節	理学部の発足と発展	580
第3節	教育・研究活動	595
第5章	医学部および附属病院	627
第1節	前 史	627

第2節	医学部・同附属病院の発足と発展	635
第3節	教育・研究・診療活動	643
第4節	教育課程	737
第5節	問題点と今後の課題	745
第6章	薬学部	777
第1節	前史	777
第2節	薬学部の発足と発展	794
第3節	薬学部の移転	803
第4節	教育・研究活動	806
第5節	附属薬用植物園	825
第7章	看護学部	837
第1節	看護学部の発足と発展	837
第2節	教育・研究活動	840
第3節	教育課程	845
第4節	現状と今後の課題	848
第8章	工学部	851
第1節	前史	851
第2節	工学部の発足と発展	856
第3節	組織と運営	863
第4節	教育・研究活動	876
第9章	園芸学部	921
第1節	前史	921
第2節	園芸学部の発足と発展	929
第3節	組織と運営	939
第4節	教育・研究活動	947
第5節	附属農場	972
第6節	関係諸団体とその行事	981
第10章	留学生部	991
第1節	留学生部の歩み	991

第2節	留学生教育の変遷	997
第3節	厚生補導	1000
第11章	生物活性研究所	1021
第1節	前史	1021
第2節	生物活性研究所への歩み	1023
第3節	研究・教育活動	1036
第12章	養護教諭養成所	1057
第1節	養護教諭養成所の歩み	1057
第2節	教育・研究活動	1060
第3節	関係諸団体と活動	1063
第13章	工業短期大学部	1065
第1節	工業短期大学部の歩み	1065
第2節	教育・研究活動	1069
第3節	特設工学課程への移行	1078
第4節	組織と運営	1081
第5節	施設・財政	1082
第14章	附属図書館	1089
第1節	発足	1089
第2節	基礎づくり	1091
第3節	西千葉地区統合整備に向けて	1092
第4節	成長期	1093
第5節	発展期	1107
第15章	分析センター	1119
第1節	分析センターの発足	1119
第2節	分析センターの運営と諸規程	1120
第3節	今後の課題	1123
第16章	保健管理センター	1125
第1節	保健管理センターの歩み	1125
第2節	保健管理センターの活動	1130

第3節 今後の課題	1131
第17章 学 生 部	1133
第1節 学生部の歩み	1133
第2節 課 外 活 動	1139
第3節 学寮・厚生福利	1148
第18章 事 務 局	1159
第1節 事務局の歩み	1159
第2節 運営と諸規程	1162
第3節 定員の推移	1172
第4節 財 政	1173
第5節 土地・建物の変遷	1176

第Ⅲ部 資 料 編

1 組 織	1197
2 規 程	1201
3 教 職 員	1256
4 講座・学科目等	1285
5 大 学 院	1296
6 歳 入・歳 出	1299
7 科学研究費補助金	1302
8 施 設	1356
9 学 生	1384
10 公 開 講 座	1408

第Ⅳ部 年 表

1 千葉大学前史年表	1414
2 千葉大学30年史年表	1484
後 記	1599
執筆者一覽	1616